人文科学研究　No.16, pp.251-263　　March 2020

幼児期のエピソード記憶調査内の発話における過去形や時に関する言葉の使用

上　原　　泉

要旨

本研究では、過去の認識を中心に、時に関する認識がどう発達するのか、その発達過程を調べるため、数ヶ月ごとに縦断的に実施してきた調査に参加してきた、幼児４名の発話記録を分析しまとめた。過去形で過去の事を語るようになった時期（２歳台）から記憶語を習得した時期（４歳直前）の発話記録を分析対象とした。その結果、“過去形”（過去の事を述べるのに使う過去形）の使用比率で、対象児間で共通した発達変化や時期間の違いは確認されなかったが、女児の方が男児よりも、全発話に占める“過去形”の使用比率が高い可能性が示唆された。時に関する言葉の使用比率は全５種類あわせても“過去形”の使用比率よりも低く、時に関する言葉のうち比較的多く使用されていたのが「過去」と「直後」に関する言葉であった。「直後」に関する言葉の使用では、対象児間で共通した特徴はみられず、「過去」に関する言葉の使用比率は、対象児間で共通して、記憶語習得時期に高いことが確認された。未来を語るための“未来形”、「未来」に関する言葉の使用は、全体を通して僅少であった。記憶に主眼をおいた調査時の発話記録に基づく分析であったことが影響している可能性はあるものの、４歳前までは、「直後」は認識できても未来に向けての認識は難しく、過去に向けての認識が発達的に先行する可能性が推測される。

問題

人の時間認識については、各学問領域で古くから関心がもたれてきたが、依然として明らかになっていないことが多い。他の動物にはない、人ならではの時間認識の特徴をよく表す用語に「心的時間旅行(mental time travel)」(Suddendorf & Corballis, 1997)がある。これは、心の中で遡って過去を思い出し、未来に向けて想像するという認知活動のことを指す。マクタガートは、時間系列には、未来・現在・過去の流れとしての時間系列（Ａ系列）と、出来事の時間的前後関係としての時間系列（Ｂ系列）があると述べているが(McTaggart, 1908/2017[訳])、この「心的時間旅行」はまさにＡ系列の時間認識の方である。本論文では、このＡ系列の時間認識の発達に焦点をあてる。心理学では近年、「心的時間旅行」的な時間認識は、自伝的記憶研究と自伝的な将来の想像研究の領域で言及されることが多い。成人の知見は積み重ねられつつあるが、子どもに関する知見は少ない。特に、４歳以前の幼児期については、自伝的記憶の形成に至る過程に関する知見はあるものの、どう「心的時間旅行」的な時間認識が可能になってくるのか、その発達過程を追究している研究は僅少である。自伝的記憶が４歳前後から発達し（Nelson & Fivush, 2004; Uehara, 2015他）、時間的拡張自己（今より少し前の自分も昔の自分も今の自分と同じで、今より少し後も将来も、今の自分と同じ自分が存在し続けるというような自己認識：Neisser, 1988）も４歳前

後から発達すること（Povinelli, Landau, & Perilloux, 1996）から、「心的時間旅行」的な時間認識が明確になるのは４歳以降と考えられる。筆者の知る限り、そもそも、国内では、「心的時間旅行」的な時間認識の発達過程に関する実証的な研究は見当たらない。そこで、本研究では、まず「心的時間旅行」的な時間認識が芽生えるまでの、４歳未満の幼児期初期の時間認識について、探索的に調べることを目的とした。幼児期初期の時間認識に関する、数少ない主要な従来の知見を紹介し、それを踏まえ、本研究で何を調べたいのかを述べる。

乳児期については、時間間隔や時間的タイミングの違いをどれくらい認知できるかが追究されており、0.5秒と１秒の違いや２秒と４秒の違いというように、１：２の比率の時間の長さの違いは、生後半年ぐらいまでに可能になる等が示唆されている（Brannon, Suanda, & Libertus, 2007; Gava, Valenza, Di Bono, & Tosatto, 2012; Droit-Volet, 2013）。しかし、過去から未来への流れとしての時間認識を乳児が有しているという議論はほぼなされておらず、言語が発達してくる幼児期以降に有するようになることが想定されている。過去や未来に対する時間認識を有していることの証拠となりうるのが、過去の出来事や未来に関することへの言及である。幼児が、自発的に未来について言及できるようになるのがいつ頃かについての一致した見解はない。一方、過去の出来事を過去になされた事として、自発的に語られるようになるのは２歳台であることが示唆されている。上原(1998；2003)、Uehara (2015)によれば、過去の事への言及が始まる頃は、言及する頻度はきわめて低く、過去の事を話すとしても、過去を問う質問に応じて述べるというよりは、見覚えのあるものを見たときに、連想的に単語を発する程度で、過去形で過去の事を語るようになるのは、大方２歳台（遅くとも４歳を迎えるまでの時期）だという。国外の知見からも、過去形での過去の語りが始まるのは、２歳台であることが示唆されている（Eisenberg, 1985; Tager-Flusberg, 1989; Weist & Zevenbergenm, 2008）。なお、いずれの論文でも、２歳台の語りの際には、保護者による足場かけが頻繁に行われていることが述べられている。見覚えのあるものを見たときに、連想的に１あるいは２，３の名詞や現在形の単語を発するのみでは、過去認識が伴っている保証はない。過去にあったという認識はなく、連想的に思い浮かべているだけかもしれないからである。過去の特定の出来事（「朝起きた」など習慣化された出来事ではない、過去の特定の出来事）を過去形で述べるのであれば、過去にあったという認識が伴っている可能性が高く、過去への認識が芽生えていると考えられるだろう。ただし、過去の語りが始まる２歳台は、過去への自発的な言及が少ないうえ、多様な時の言葉を使用しているとの報告はないことから、その認識はまだ明瞭とはいいがたいかもしれない。Weist & Zevenbergenm (2008)によると、英語母語の幼児がwhen節を使って過去の事を話すようになるのは３歳半頃だという。３歳を対象に過去や未来の認識を検討している研究としてHarner(1981)がある。Harner(1981)は、英語を母語とする３歳から７歳の子ども100人を対象に、対面でおもちゃを動かして見せた後、もしくは、動かそうとしているところを見せた後に、おもちゃの動きについて、過去形や未来形、時に関する言葉を使ってどう説明するかを調べた。３歳台の幼児においても適切に過去形や未来形が使用されており、過去、現在、未来の順序性は理解できているのではないかということ、ただし、他の年齢と比し、過去と未来のいずれの行動説明時にも、現在形で表現する割合が高いこと、他の年齢の子どもと同様に、完了したばかりの過去の行動を言及するために過去形を使用することが多いうえ、未来への言及表現において“is going to”が多いことを指摘した。昨日と明日という言葉を使って、昨日行った事／明日行う可能性が高い事、昨日行わなかった事／明日行う可能性が低い事を、３歳、４歳、５歳の子どもを対象に質問してその回答を分析した調査では、昨日と明日を区別して、適切に想起し想像できる子どもの割合は、３歳ではきわめて低く、４歳、５歳でその割合は高かったことが示されている（Busby & Suddendorf, 2005）。

Uehara (2015)では、「さっき見た絵はどれですか」や「さっき、この絵は見ましたか、見ませんでしたか」といった再認の質問自体、３歳になるまでは理解できず、３歳台になって、それらを理解し適切に反応できるようになること、また、自発的に「覚える」「忘れる（記憶していることを)」という記憶語を使用するようになるのは、４歳前後であることが示されている。これらの知見に基づくと、４歳頃までの時間認識については以下のようにまとめられるだろう。過去を過去形で語り始める２歳台に時間認識は芽生えるがまだ不明瞭で、その認識が少し明確になってくるのは、過去を問う質問を理解し、時に関する言葉の使用や種類が増えてくる３歳台と推測される。「覚える」「忘れる」といった記憶語は、心的に過去を振り返るということに関わる用語であるため、将来に向けての想像については不明だが、「心的時間旅行」的時間認識は４歳頃から明瞭になってくる可能性が考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、まず、過去形で過去の語りが始まる頃から、「心的時間旅行」的時間認識が芽生えると推測される、記憶語（「覚える」「忘れる」）習得時期までの、幼児の発話を詳細に調べ、過去形や（日本語では未来形という時制はないが）明らかに未来を述べている未来形の使用、時に関する言葉の使用の様子を把握するところから始めたいと考えた。筆者の知る限り、子どもの時間認識に関わる発話分析のデータが国内にはないため、規模の小さいデータではあるが、本研究は、国内での当該研究の進展に向けての、基礎資料になりうると考える。

方法

参加者

数ヶ月ごとに縦断的に実施してきた面談調査（Uehara, 2015他）に、参加してきた４名（男児２名、女児２名）の子どもの、ある期間の面談時の発話データを分析対象とした。毎回、母親に調査の概要を説明し、面談開始時に同意いただけるかを確認し、同意書への署名をいただいたうえで、面談調査を実施した。子どもが楽しく取り組めるよう、遊びを交えながら調査を実施した。分析対象となった、各子どもの参加期間と面会回数は、男児Ａが２歳４ヶ月～３歳９ヶ月の８回、男児Ｂが３歳０ヶ月～３歳11ヶ月の６回、女児Ｃが２歳10ヶ月半～３歳11ヶ月の７回，女児Ｄが２歳７ヶ月～３歳11ヶ月の６回であった。

各子どもにおいて分析対象となった期間は、それぞれ、過去形で過去を語るようになった時期（M1）から言語的な再認開始時期（M2）を経て、記憶語（「覚える」もしくは「忘れる」）の自発的な使用開始時期（M3）に至った期間であった。つまり、男児Ａについては、M1が２歳４ヶ月～２歳６ヶ月で、M3が３歳９ヶ月であったことから、対象期間は２歳４ヶ月～３歳９ヶ月となっている。各児における、M1,

表１：各子どもにおける３つの時期の月齢と各時期の面談回数

Child		過去形で過去を語るようになった時期(Milestone 1：M1)	(M1-M2)	言語的な再認開始時期 (Milestone 2: M2)	(M2-M3)	記憶語の自発的使用開始時期 (Milestone 3: M3)
A	Boy	2 y, 4 m–2 y, 6 m（2回）	（2回）	3 y, 2 m（1回）	（2回）	3 y, 9 m（1回）
B	Boy	2 y, 10 m–3 y, 2 m（2回）	（2回）	3 y, 9 m（1回）	—	3 y, 11 m（1回）
C	Girl	2 y, 10.5 m–3 y, 1 m（2回）	（2回）	3 y, 7 m（1回）	（1回）	3 y, 11 m（1回）
D	Girl	2 y, 7 m–2 y, 11 m（2回）	（2回）	3 y, 8.5 m（1回）	—	3 y, 11 m（1回）

M2, M3の３つの時期と各時期の面談回数については表１にまとめたので参照されたい。なお、詳しくは後述するが、M1, M3の開始時期は、母親の証言に基づいて特定されているが、M2については、面談時に実施された再認課題により初めて可能になっていることが確認された時期として特定されている。

本調査は、複数の調査内容から成る縦断的研究のうち、幼児期に参加いただいた調査内での、時に関わる発話や発話形式に焦点をあてて分析したものである。女児２名は上原（1998）の参加者であり、４名全員が上原（2014）とUehara(2015)の参加者だが、いずれの研究も幼児期の認知課題（記憶課題や感情課題）と親によるチェックリストへの記述に基づく時期同定、どれくらい記憶できているか否か等について内容検討を行った調査研究であり、発話分析により時に関する言葉や各発話形式の使用割合を比較検討している本調査内容とは異なっている。また、４名全員が、上原(2017)の参加者でもあるが、上原(2017)は彼らが児童期以降になって参加した面談調査内で語った記憶内容の分類研究であり、本調査内容と異なっている。

手続き

分析対象となった発話は、自由会話と記憶に関する質問への応答から成り立っていた。分析対象となった、１回の面談時の発話記録時間は１時間半前後であった。４名の子どもの発話データをあわせて、M1の時期、M1～M2の時期、M2の時期、M2～M3の時期（対象児B, DについてはM2を迎えた面談時の次の面談時にM3を迎えたため、M2～M3の時期に相当する発話記録はなく、対象児A,Cの発話データのみが含まれている時期)、M3の時期ごとに、過去の事を述べるために“過去形”で発話した回数、未来の事を述べるために“未来形”で発話した回数、時に関する言葉（５種類）の発話回数を算出し、これらの発話回数が各時期の全発話回数に占める比率をもとめ比較した。一人が発した一続きの発話を１回と数えた。いずれも、オウム返しでの発言はカウントせず、自発的になされた発言をカウントした。

次に、M1, M2, M3の定義とその特定法（詳細はUehara[2015]を参照されたい)、M1～M3の期間に焦点をあてた理由を簡潔に述べる。M1は、過去のエピソード（今より過去にあった本人に関わる事柄）を過去形で自発的に話し始めた時期を指す。どの対象児においても、面談内の発話における初出時期より、母親の証言（母親のチェックリスト上の記述とその記述に関する聞き取り）による初出時期の方が少し早かった。過去の出来事の発言が幼児期初期はなかなかみられない点を考慮し、M1は、母親の証言による初出時期から面談での初出時期と、幅を持った時期として特定した。例えば、対象児Ａでは、母親の証言によると２歳４ヶ月が初出時期であり、面談時に初めて確認したのが２歳６ヶ月であるため、対象児ＡのM1は、２歳４ヶ月～２歳６ヶ月となった。

M2は再認課題の質問（「さっき見た絵はどれですか」や「さっき、この絵は見ましたか、見ませんでしたか」といった再認の質問）を理解し、適切に応じられるようになった時期を指す。詳しくいうと、面談時に毎回、強制二肢選択形式（新旧５組ペアから選択させる課題）と、はい／いいえ型式（新旧５問ずつ計10問から成る課題）の再認課題を実施し、前者については全問正解、後者については９問以上正解を基準に、両方の課題で基準に達した面談時点を、言語的な再認が可能になったことが確認された時期（M2）とした。２つの課題にともに到達した面談時以降の面談では、どの対象児においても、再認課題成績はすべて正答であることを確認している。M3とは、「覚える」または「忘れる（記憶していることを忘れる意味)」を自発的に話し始めた時期を指す。M1と同様に、面談内の発話における初出時期と母親の証言による初出時期により特定したが、どの対象児においても、面談内での初出時期と母親による初出の証言時期が一致していたため、その時期をM3とした。

「問題」で述べたとおり、M1は過去への認識が言語的に初めて表現される時期で、M3は「心的時間旅行」

的時間認識が芽生えると予想され、M1の時期からM2を経てM3に至るまでの時期において、過去や記憶に関する認識のあり方が大きく発達変化する可能性が推測されたため、M1～M3に焦点をあてて分析することにした。

次に、特定した、“過去形”、“未来形”、時の言葉のそれぞれの定義とカウントの仕方について順に説明する。まず、“過去形”と“未来形”について述べる。日本語では、英語にあるような過去形、未来形という時制表現が、厳密にはない。眼前で起きたばかりの現在完了の内容も、日本語では過去形で表現する。例えば、「ふうせんがわれた！」「あ、落ちた！」などと表現する。そこで、Uehara(2015)の手法により、明らかに過去に生じた、今現在に持続していない事態に関して過去形で述べられている発話のみを、“過去形”発言として特定しカウントした（詳細はUehara[2015]を参照）。未来のことを、日本語では現在形で述べることがある。過去の事実に基づいて過去形で述べているか否かの判断とは異なり、現在形で述べられていることについて、未来のことを指して話しているのか否かの判断は、時に関する言葉（例えば、いつか、今度、次など）が伴っていない場合は判断しにくいこと、時に関する言葉を伴った未来表現については後述のとおりカウントすることを考慮し、「しよう」「でしょう」「だろう」と、明らかに未来を意味する表現がされているものを、“未来形”発言としてカウントした。日本語では、動詞の表現形式は時制と完全対応しておらず、幼児における、言語的な時の認識のあり方をとらえるのに、動詞の表現形式のみチェックするのは不十分である。むしろ、時の言葉の使用に、幼児の言語的な時の認識のあり方が現れていると思われ、時に関する言葉の使用比率も調べることにした。

時に関する言葉については、「過去」を意味する言葉（さっき、この前、ずっと前、前、この間、もう、水曜、今日【面談に来る前にあった事柄】）、「現在・日常」を意味する言葉（いつも）、「今現在」を意味する言葉（今、まだ、ずっと）、今よりすぐ後の「直後」を意味する言葉（今度[は]、次、あと[は]、また、もうすぐ）、「未来」を意味する言葉（明日）に分類した。

結果

４名のデータをあわせた、各時期の総発話内（M1時：1237発話、M1-M2時：2048発話、M2時：1048発話、M2-M3時：1334発話、M3時：1029発話）にしめる、過去の事を話すための“過去形”、今より後の事を話すための“未来形”の使用比率を表したのが図１である。

“過去形”の使用比率はどの時期も１割に満たず、“未来形”の使用比率はさらに低く、４名のデータをあわせても、各時期に数例以内ときわめて少なかった。個人別にみると“未来形”については「ない、0回」というセルが多かった。４名のデータをあわせた“過去形”の使用比率において、５つの時期間で有意差がみられた（$\chi^2=62.1$, $df=4$, $p<.01$; 残差分析で、M2の時期で$p<.05$、それ以外の時期は$p<.01$）。M1-M2, M2, M3の時期は有意に高い比率で、M1, M2-M3の時期は有意に低い比率で、“過去形”を使用していたことを意味する。個人差がある可能性も考えられたため、個人ごとに、時期間で“過去形”の使用比率に差があるかについても、調べてみた。個人ごとに、“過去形”、“未来形”の使用比率を示したのが図２～図５である。

対象児Aにおいて“過去形”の使用比率に５つの時期間で有意差がみられた（$\chi^2=19.7$, $df=4$, $p<.01$; 残差分析で、M2の時期で$p<.05$、M1, M3の時期で$p<.01$）。他の時期より、M3, M2の時期は有意に高い比率で、M1の時期は有意に低い比率で、過去の事を“過去形”で述べていたことを意味する。対象児Bにおいては“過去形”の使用比率に時期間で有意差はみられなかった（$\chi^2=4.02$, $df=3$, $p>.05$）。対象児Cにおいて

図１：発話内における“過去形”と“未来形”の使用比率

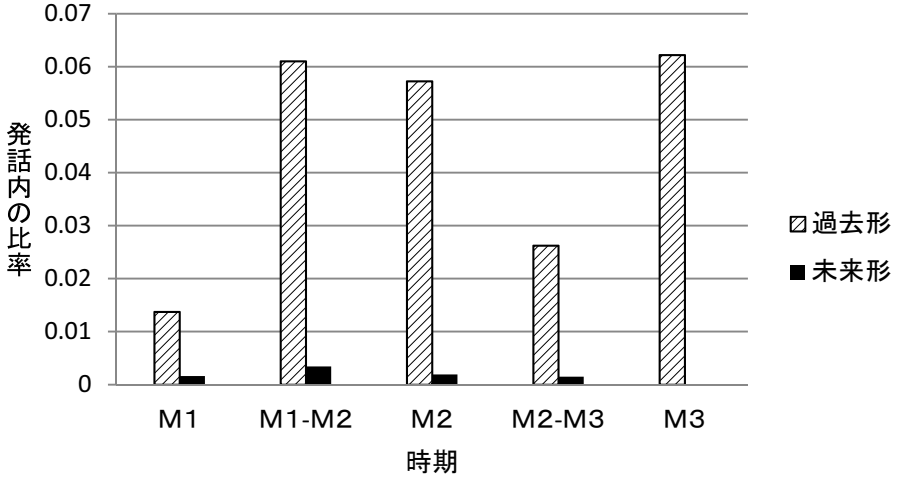
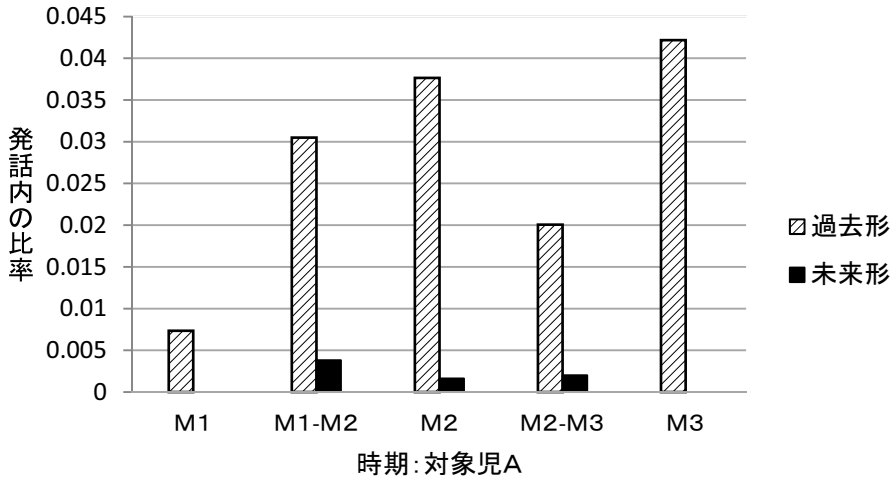


図２：発話内における“過去形”と“未来形”の使用比率：対象児A



は時期間で有意差がみられ（χ^2＝92.6, df＝4, p<.01; 残差分析ではすべての時期でp<.01）、対象児Aと共通して、M3, M2の時期は有意に高い比率で、M1の時期は有意に低い比率で、過去の事を“過去形”で述べていたことがわかる。意外なことに、対象児Cで、M2-M3の時期の使用比率が、有意に低かったことが示されている。対象児Aでは、残差分析でM2-M3の時期に有意性は示されなかったが、２名の結果をあわせた図１の結果においても、M2-M3の時期の使用比率が有意に低かった。M2-M3の時期の発話があったのはA, Cの２名のみであり、この結果については後ほど考察したい。対象児Dにおいても時期間で有意差がみられたが（χ^2＝161.2, df＝3, p<.01; 残差分析で、M1-M2, M2の時期でp<.01）、M1-M2, M2の時期に有意に高い比率で、過去の事を“過去形”で述べていたことがわかる。有意差の出方に個人差がみられ、“過去形”の使用比率において対象者間で共通した、大きな発達変化はないことがうかがえる。“過去形”の使用は、過去の事柄を過去のことと認識して自発的に述べられていることを意味しており、いずれの時期も、発話のう

図３：発話内における“過去形”と“未来形”の使用比率：対象児B

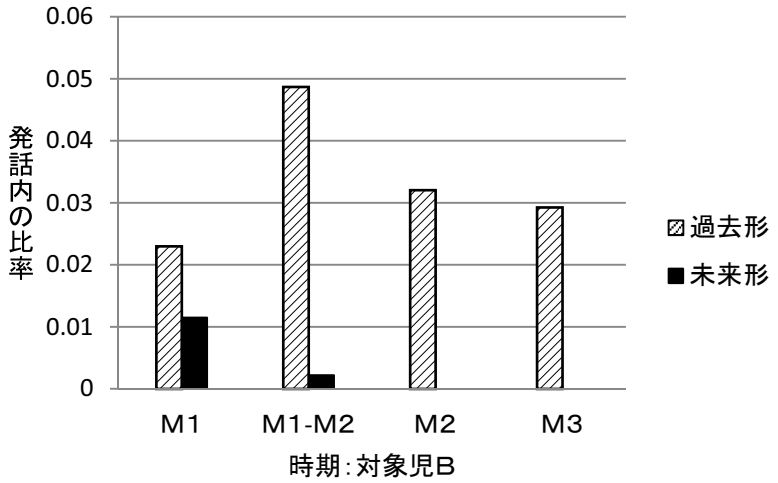
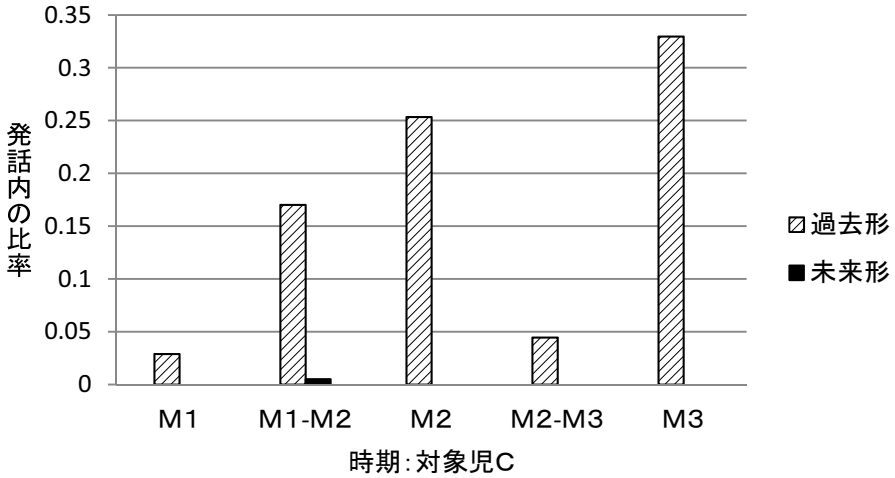


図４：発話内における“過去形”と“未来形”の使用比率：対象児C



ちの１～６％と比率は低いとはいえ、M1時期以降は、過去の認識自体は芽生えており、M3に至る４歳頃まで、その使用比率に大きな差があるわけではない可能性が示されている。ただし、１点興味深い点が見出された。各子どもが、この時期に表出した“過去形”の使用比率についてみると、対象児Aが0.026、対象児Bが0.040、対象児Cが0.113、対象児Dが0.070で、使用比率において対象児間で有意差がみられた（χ^2＝161.2, df＝3, p<.01; 残差分析で対象児A, C, Dでp<.01）。対象児A（男児）で有意に低い比率で、対象児C, D（いずれも女児）で有意に高い比率で“過去形”を使用していたことを意味し、女児の方が、男児よりも、過去を語り始める時期から、全体の発話に占める過去の事を話す割合が高い可能性が示唆されている。

時に関する言葉の使用比率は、５種類合わせても、“過去形”の使用比率よりも、いずれの時期においても低かった（５種類あわせた、時に関する言葉の使用比率：M1時0.0057、M1-M2時0.0190、M2時0.0229、M2-M3時0.0127、M3時：0.0292）。各時期における、５種類の時に関する言葉の表出比率を表したのが図６である。

図 5 ：発話内における“過去形”と“未来形”の使用比率：対象児D

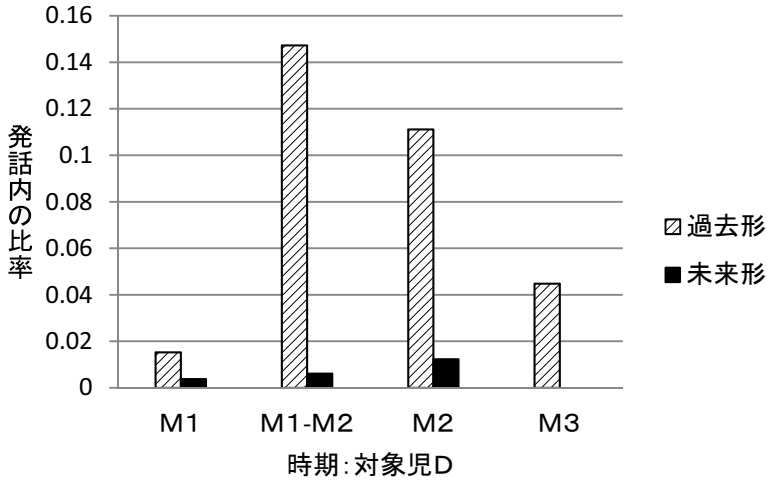
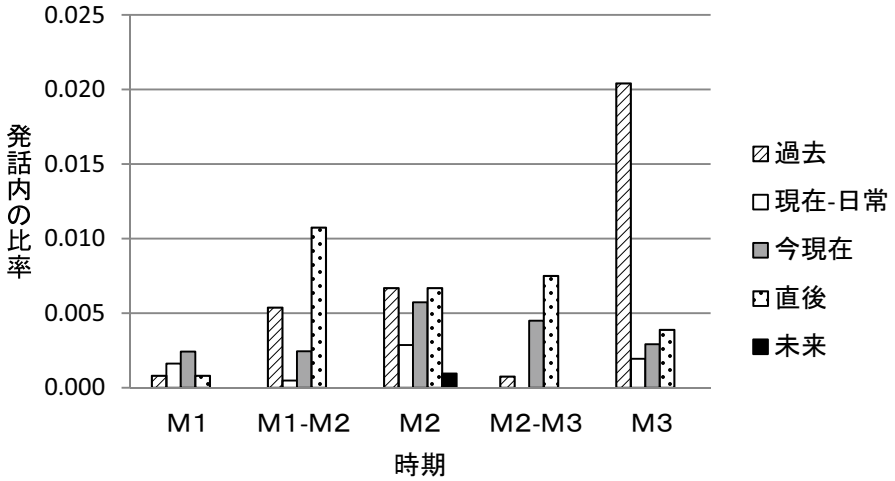


図 6 ：発話内における時に関する言葉の使用比率



「未来」を意味する時の言葉の使用は、4 名の全時期を通して 1 例（明日）のみであった。また、「現在・日常」を意味する言葉（いつも）の使用は、4 名の全時期を通して 8 例のみで、個人ごとにみると、ほぼ、各時期の使用回数は 0 か 1 であった。「今現在」の使用は、 4 名の全時期を通して23例で統計分析をかけるには十分な数に達していなかった。「今現在」に関わる言葉については、対象児Ａが 4 つの時期で数回以上使用していたが、対象児Ｂにおいて、2回使用されていた時期が 1 つあったものの、対象児Ｂの他の時期の使用回数、対象児C, Ｄのすべての時期における使用回数は0か1であった。「直後」と「過去」に関する時の言葉の使用が、 4 名の全時期をあわせて、それぞれ、44回、41回であり、統計分析にかけて検討することにした。「直後」を表す言葉の表出比率において、時期間で有意差がみられ（χ^2=13.1, df=4, p < .05; 残差分析でM1, M1-M2の時期でp < .01)、「過去」に関する言葉の使用比率においても時期間で有意差がみられた（χ^2=46.8, df=4, p < .01; 残差分析でM1, M2-M3, M3の時期でp < .01)。M3の時期（記

憶語習得時期）において、「過去」に関する時の言葉の使用比率が有意に高いことが確認された。個人ごとのデータについては、統計分析にかけられるだけの回数に達していないため、図に示すのにとどめるが（図７～図10参照）、「過去」に関する言葉の使用は、M3の時期に共通して一番多いことが見てとれる。「直後」に関する言葉については、対象児間で共通した、時期による使用頻度の違いはみられない。「現在・日常」「今現在」「未来」については、この時期、使用頻度がきわめて低かった。

図７：発話内における時に関する言葉の使用比率：対象児A

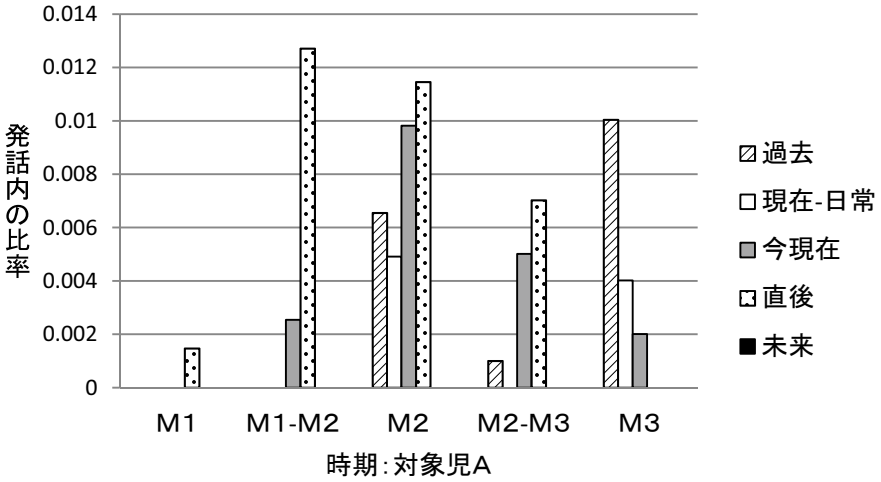
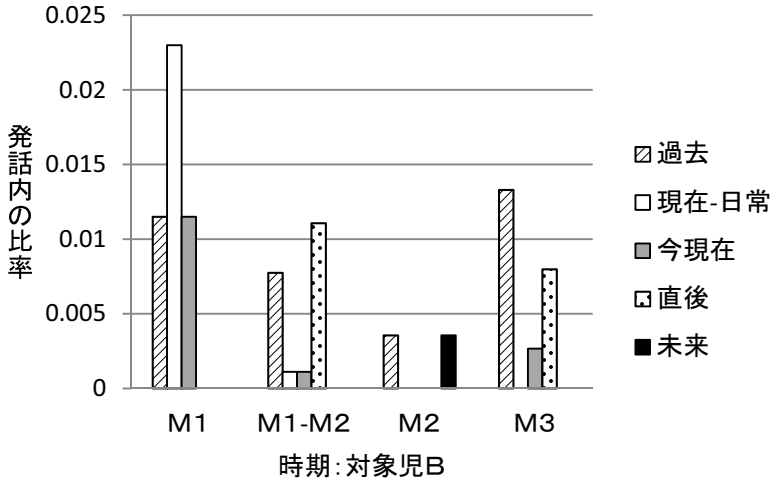


図８：発話内における時に関する言葉の使用比率：対象児B



今回カウントした“過去形”や“未来形”、時に関する言葉を伴っていない、表出はどのようなものであったのか。意味をなさない発言もみられ、多様で分類しきれていないが、次のようなものであった。動詞を含む場合は現在や現在完了の表現、「ああ」「ブーブー、ブー」「あれ」など分類の難しい無意味発話やオノマトペ、また、品詞を問わず、一語発話（「〇〇！」、「ほしい」「とって」）やオウム返し（母親や調査者の発言を真似して言う発言）などが多くみられた。

図 9 ：発話内における時に関する言葉の使用比率：対象児C

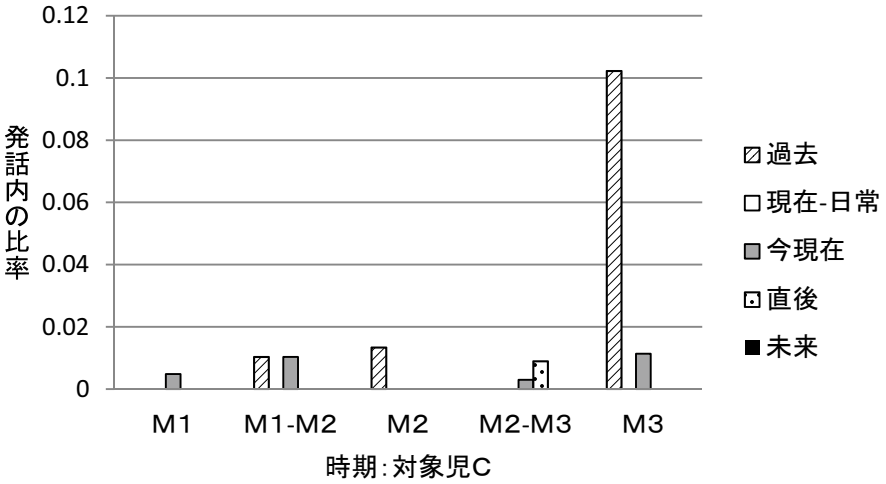
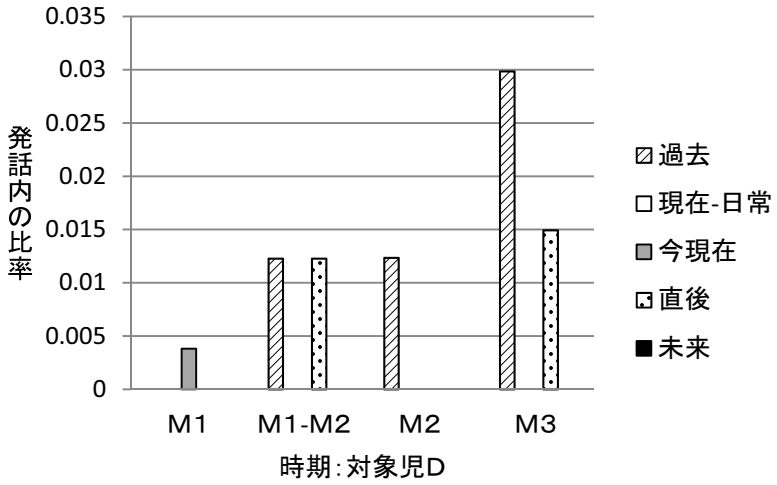


図10：発話内における時に関する言葉の使用比率：対象児D



考察

本調査結果は次のようにまとめられる。“過去形”の使用比率は、４名あわせてみると時期間で有意差がみられるものの、個人別にみると、その差の出方は個人ごとに異なり、過去形で過去を語り始める時期から記憶語習得に至る、２歳台から３歳終わり頃までの間は、その使用度合において、時期間で特筆すべき差はみられないことが確認された。ただし、M2-M3の時期の発話があったのはA，Cの２名のみであったとはいえ、M2-M3の時期における“過去形”の使用比率が他の時期に比し低かった点が気になる。この原因については不明である。データの詳細をみると、面談１回あたりの総発話数の平均値が、M2-M3の時期（444.7）が他の時期（M1の時期が154.6,他の時期は256～262）より高く、それにより使用比率が低くなっ

ている。発話数は個人差が大きいうえ、個人内でも気分により変わるため、偶然低かった可能性は否定できないものの、発話形態や内容の発達変化が関係している可能性も考えられる。今後、発話データを蓄積し、これらの発達的変化を含めて、詳しく分析してみる必要があると考える。なお、女児における使用比率の方が男児より有意に高かった。また、“未来形”の使用比率は一貫して低いことが確認された。

時に関する言葉については、そもそも全体的に使用比率が低く、中でも「現在・日常」「今・現在」「未来」に関する言葉の使用がきわめて低かった。その中で比較的使われていたのが、「過去」と「直後」に関する言葉であった。「直後」に関する言葉の使用については、２歳台から３歳終わり頃までの間は、その使用度合において、特に時期間で差がない可能性が示されたが、「過去」に関する言葉の使用については、２歳台から３歳終わり頃までの時期において、記憶語が習得される、すなわち、「心的時間旅行」的時間認識が発達してくると思われる時期の使用比率が、４名の子どもで共通して高かった。

この結果をどう解釈したらよいか。以下で考察していく。まず、全体として“過去形”、“未来形”、時に関する言葉の使用比率は少なかった点が注目に値する。実際の記憶報告部分は少なかったとはいえ、記憶報告に主眼をおいて集められた発話データであったにもかかわらず、“過去形”や「過去」に関する言葉の使用比率は想定していたよりも低かった。むしろ、記憶報告に主眼をおいて集められた発話データであったからこそ、“未来形”や他の時に関する言葉の使用比率ほど極端に低かったわけではないといえるのかもしれない。いずれによせ、この時期の幼児では、少なくとも過去への認識は可能だとしても、過去や未来へ認識を向けることが少ないことがうかがえる。時間認識に関わらない、意味をなさない発言やオウム返し、一語発話などが多く、今、現在の目の前のことに関心が向いていることを意味していると思われる。記憶語習得時期に、「過去」に関する言葉が４名で共通して増えているが、このこと自体、「心的時間旅行」的時間認識が４歳前後から始まり、過去への意識が、それ以前と変わっていくことを示唆しているのかもしれない。

従来の知見との関係を考察したい。本データにおいて、「直後」に関する言葉が、「過去」に関する言葉と同じくらい使用されていた点は、狭い時間範囲の未来への言及をもとめた課題内とはいえ、Harner(1981)で示唆されている、３歳～７歳の子どもにおける”is going to”使用率の高さと共通する特徴ではないかと考えられる。記憶報告に主眼をおいて集められた発話データであることで未来に関わる発言が極端に低くなってしまった可能性は否定できないものの、直後は考えられても未来への認識は希薄で、過去に向けての認識が発達的に先行する可能性が推測される。過去への認識期間については、Uehara(2015)での、この時期の幼児の記憶報告に関する分析が参考になる。そもそも過去の出来事の報告自体、この時期の幼児では少ないが、そのうち、数ヶ月以上前のことも散見されるものの比率はかなり低いことが確認されている。未来に向けての認識において、明日は理解できているものの（Busby & Suddendorf, 2005)、日常的に注意が向いているのはほぼ直後が中心であるのに対して、過去に向けて認識しやすい時間範囲は直前ばかりではないとしても、おそらく数日単位と狭く、数ヶ月以上前まで意識が及び振り返ることは、記憶語習得時期まではかなり少ないと推測される。

本結果を、４歳終わりから５歳にかけての１名の子どもによる、明日と昨日を中心とした時間に関する発話とその考察（平田, 2019）に、照らし合わせてみると、記憶語を習得し自伝的記憶や時間的拡張自己が成立してくる４歳以降に、時間認識の発達上、大きな質的変化が生じる可能性が推測される。また、今回、表出された、時に関する言葉は限られていたが、４歳以降は、その表現の種類が増えていくものと推測される。次は、４歳以降の発話分析をすすめ、幼児期初期から後期にかけての時間認識における発達変化を把握できればと考える。

引用文献

Brannon,E.M., Suanda, S., & Libertus, K. (2007). Temporal discrimination increases in precision overdevelopment and parallels the development of numerosity discrimination. *Developmental Science*, **10**, 770–777. doi: 10.1111/j.1467-7687.2007.00635.x

Busby, J., & Suddendorf, T. (2005). Recalling yesterday and predicting tomorrow. *Cognitive Development*, **20**, 362-372.

Droit-Volet, S. (2013). Time perception in children: a neurodevelopmental approach. *Neuropsychologia*, **51**, 220-34. doi:10.1016/j.neuropsychologia.2012.09.023.

Eisenberg, A. R. (1985). Learning to describe past experiences in conversation. *Discourse Processes*, **8**, 177–204. doi:10.1080/01638538509544613.

Gava, L., Valenza,E., Di Bono, M. G, & Tosatto, C. (2012). Discrimination and ordinal judgments of temporal durations at 3 months. Discrimination and ordinal judgments of temporal durations at 3 months. *Infant and Behavioral Development*, **35**, 751-60. doi: 10.1016/j.infbeh.2012.05.009.

Harner, L. (1981). Children talk about the time and aspects of actions. *Child Development*, **52**, 498–506.

平田 聡 (2019). ヒト幼児の時間の理解―自然な発話事例による考察. 連載：霊長類の比較発達心理学. 発達, **159**「自然と子ども」, 83-91.

McTaggart, J. M. E. (1908). The Unreality of Time. *Mind*, **17**, 457-74.（マクタガート, J. M. E.（著）永井均（訳他）(2017). 時間の非現実性　講談社）

Neiseer, U. (1988). Five kinds of self-knowledges. *Philosophical Psychology*, **1**, 35-59.

Nelson, K., & Fivush, R. (2004). The emergence of autobiographical memory: A social cultural developmental theory. *Psychological Review*, **111**, 486–511.

Povinelli, D. J., Landau, K. R., & Perilloux, H. K. (1996). Self-recognition in young children using delayed versus live feedback: Evidence of a developmental asynchrony. *Child Development*, **67**, 1540-1554.

Suddendorf, T. & Corballis, M. C. (1997). Mental time travel and the evolution of the human mind. *Genetic Social and General Psychology Monographs*, **123**, 133–167.

Tager-Flusberg, H. (1989). Putting words together: Morphology and syntax in the preschool years. In J. B. Gleason(Ed.), *The development of language*. 2nd ed. Columbus, OH: Merrill; 1989. Pp. 135–165.

上原 泉 (1998). 再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の関係―縦断的調査による事例報告―. 教育心理学研究, **46**, 271-279.

上原 泉 (2003). 第II部　発達－記憶, 心の理解に重点をおいて－. 月本洋・上原泉著　想像：心と身体の接点（pp.117-182）. 京都：ナカニシヤ出版.

上原 泉 (2014). 心的用語の理解と過去のエピソードの語りの発達的関係―縦断的な事例データによる予備的検討―. お茶の水女子大学人文科学研究, **10**, 111-121.

Uehara, I. (2015). Developmental changes in memory-related linguistic skills and their relationship to episodic recall in children. *PloS one*, 10(9), e0137220. doi:10.1371/journal.pone.0137220

上原 泉 (2017). 児童期以降の快-不快感情を伴う自伝的記憶―縦断的な事例データによる予備的検討―. お茶の水女子大学人文科学研究, **13**, 135-150.

上原 泉 (2018). 幼児期における過去形や時に関する言葉の使用：少人数の縦断的な発話データによる予備的検討. 日本心理学会第82回大会, 仙台国際センター. 第82回大会発表論文集, 858.

Weist, R. M, & Zevenbergenm, A. A. (2008). Autobiographical memory and past time reference. *Language Learning and Development*, **4**, 291–308. doi:10.1080/15475440802293490.

付記

本研究は、日本心理学会第82回大会で発表した内容（上原, 2018）を再整理、加筆修正し、論文化したものです。なお、本論文内のデータを収集した当時、研究倫理審査委員会は設置されていませんでしたが、毎回面談前に、保護者の皆様に調査概要と記録をとらせていただくことを説明し、ご了承と同意書への署名をいただいたうえで参加いただきました。本研究にご協力いただきましたお子様と保護者の皆様に、心よりお礼申し上げます。